

シソーラスにおける多義語の扱いについて

大塚 みさ

早稲田大学大学院文学研究科

m-otsuka@super.win.or.jp

1. はじめに

日本語の語彙を意味の観点からみると、どのような語がどのように関わり合っている存在しているのだろうか。このような関心のもとに文脈において語が担う意味に着目すると、多義語と呼ばれるものの存在が焦点化される。本研究は、多義語を「おかれる文脈によってさまざまに解釈されうる語」と再定義した上で、語の多義性という観点から現代日本語の語彙体系の把握を目指している。文脈によって異なってみえる語の意味と語の固有の意味とは別の次元にあるものとみなし、それぞれを文脈の意味、語彙の意味とよんで区別する。ここで語の多義性について問題となるのは文脈の意味である。以下で多義語の意味という場合は、この文脈の意味を指す。ある語が多義であるか否か、また多義の度合いは、語固有の属性というよりは文脈においていかにとらえられるかによって決定されるものである。この文脈の意味をとらえる基準を、それが該当する意味カテゴリーの異同に求めることができないだろうか。

このような仮説のもとに、大塚 (1995b) では、辞典の見出し語と語義記述を『分類語彙表』の意味分類を物差しとして概観することにより、多義化の傾向を追究している。多義語の複数の語義の中から一義を軸と仮定し、それと他の語義との関係を5つの〈大項目〉¹——〈抽象的關係〉〈人間活動の主体〉〈精神および行為〉〈生産物および用具〉〈自然物および自然現象〉——の枠組みを用いてとらえたものである。この結果により多義化の傾向が数量的に把握され、意味カテゴリーが多義の一指標となりうるということがほぼ認められたと思われる。さらに、ここで注目されるのは、多義語の語義が同カテゴリー間で認められる場合には、異カテゴリー間の多義とは異なった様相を表す点である。異カテゴリー間の多義として最も多く見られたのは、〈自然〉を軸として〈抽象〉や〈生産物〉に該当する意味をも表すケースと、〈抽象〉を軸とし〈精神〉をも表すケースであり、主として比喩的な原理に基づくものである。

¹ 〈大項目〉および3章で用いる〈中項目〉〈小項目〉の名称は、宮島達夫氏「意味分野と語種」(国語研究所報告 65 研究報告集一2一, 1980) によるものである。

一方、同カテゴリー間では、たとえば全体と部分の関係にあるケースや、焦点の在処を違えるような多義がみられる。

しかしながら、分類体系の細かさによって、ある語の意味が該当するカテゴリーも変わってくる。先の研究で用いている5つの〈大項目〉は、意味カテゴリーとしては分類の目が粗いものであることから、より細かな分類を用いた綿密な考察を行う必要があると考えられる。この『分類語彙表』は〈大項目〉より細かい分類項目をも備えてはいるが、いくつかの点で本研究にそのまま用いることは適当でない。現在、実例の分析と並行しながら、本研究の目的にあわせて見直しを行っているところである。

大塚 (1995b) で用いているのは『分類語彙表』そのものではなく、その分類体系の一部である。ここで用いた初版では多義語の収録を徹底していないことがその理由であるが、『分類語彙表』は現在増補作業が進められており、多義語を取り入れる方針へと変わりつつある。そこで、現時点でなされている多義語の収録のしかたを探り、本研究の観点から、シソーラスにおいて多義語をどう扱うべきであるかという点を検討したい。

2. 『分類語彙表』〈増補版〉について

国立国語研究所による『分類語彙表』は、初版が1964年に出版された後、増補作業が進められ、1996年3月に「『分類語彙表』形式による語彙分類表(増補版)」(以下〈増補版〉)が公開されている。増補事業のあらましを前書きを見ると以下のようになっている。

①方針決定 体系の大きな変更は行わない。ただし、多義語を入れる。サ変動詞の語幹となる語を用いる類にも入れる。／ ②候補語の選択 複合語・新語・多義語・慣用語・オマトベ・専門語等、全体に語を増やす。／ ③仮番号付け、段落および段落内の位置決定。／ ④項目内の調整 語の追加削除・項目内の類義関係の修正・それにとりあう新段落設定。／ ⑤増補版を公開し、広く意見を聞く。／ ⑥項目間の調整 品詞分類間の調整ほか／ ⑦全体の見直し 機会あるごとに行う。

／ ⑧表記などの統一 ただし表記の基準を示す
ものとはしない。／ ⑨公刊

〈増補版〉という名称からうかがえるように、主として収録語数の増補に重点が置かれている。①②によれば、これまで原則としてその収録に積極的ではなかった多義語を入れる方針となっている。現時点で多義であるもの、すなわち重複した項目に収録されている見出し語を異なり語数で〈初版〉と比較して表 1 に示す。なお、いずれもフロッピー版を用いてその表記形と読みとの一致度により同語異語判別を行い、算出した値である。また、〈増補版〉で付されている〈小項目〉内の段落番号、行番号等に関してはここでは考慮していない。

項目数	〈増補版〉					〈初版〉	
	体の類	用の類	相の類	その他	総計	総計	
10～	3	-	-	-	3	-	-
9	2	1	-	-	3	-	-
8	2	3	1	-	6	-	-
7	4	5	-	-	9	1	1
6	12	17	2	-	31	1	1
5	30	39	11	1	81	3	3
4	137	139	56	2	334	30	30
3	829	723	228	4	1,784	244	244
2	5,298	2,978	1,161	54	9,491	2,533	2,533
1	41,492	12,623	6,585	608	61,308	30,030	30,030
総計	47,809	16,528	8,044	669	73,050	32,842	32,842
延べ	55,443	21,669	9,890	741	87,743	35,976	35,976

表 1: 『分類語彙表』における多義語の分布

2 項目以上に収録される語を多義とみなすと、全体に占める多義語の比率は初版で 8.5%、〈増補版〉では 16.1% であり、7.6 ポイントの増加がみられる。また、ここでは〈増補版〉についてのみ品詞論的観点からの類別に語数を算出しているが、4 類のうち最も多義語の比率が高いのは〈用の類〉すなわち動詞であり、23.6% である。

次の表 2 は、〈増補版〉において複数の項目に収録される動詞の内訳を語構成別に示したものであり、あわせて 6 項目以上に収録される語の一覧をあげている。なお、先のまえがきに見られたように、〈増補版〉では〈用の類〉にサ変動詞語幹や句を含んでいるが、表 2 ではこれらを除いて値を算出した結果を示している。

数値上は確かに多義語の比率が高くなっているが、その処理はどのようにおこなわれつつあり、またそこにはどのような問題があるのであろうか。前章で述べたように、本研究は文脈における解釈の多様性という観点から多義をとらえる立場にある。そこで、

項目数	単純動詞 和 855 混 15	複合動詞 和 1,040 混 7	サ変動詞 和 80 混 1,381	総計 和 1,975 混 1,403
9	1 ①	-	-	1
8	3 ②	-	-	3
7	5 ③	-	-	5
6	12 ④	1 ⑤	2 ⑥	15
5	28	8	5	41
4	72	40	26	138
3	212	190	242	644
2	537	808	1,186	2,531
総計	870	1,047	1,461	3,378
延べ	2,278	2,392	3,239	7,909

①…上がる／②…構える、詰まる、抜く／③…あおる、上げる、出す、外れる、参る／④…訴える、掛ける、構える、こもる、従う、倒れる、つかえる、届ける、抜ける、払う、引く、持つ／⑤…取り外す／⑥…推進する、破綻する

表 2: 多義語動詞の種別分布

次章において、この観点から実際の文脈での使用例と照らし合わせながら、シソーラスにおける多義語の収録について検討してみることにする。

3. 〈増補版〉における多義語の収録

—いくつかの動詞を例として—

本章では、〈増補版〉に収録される多義語の動詞のいくつかを毎日新聞での使用例と照らし合わせながら、シソーラスでの多義語の扱いについて問題点を検討する。また、前章の表 1、表 2 では、複数の項目に重複して収録される語を以て多義とみなしたことになるが、このなかには文脈における解釈の多様性から生じたものではなく、別の理由で生じたものが潜んでいると考えられる。その理由についてもあわせて考えてみたい。

3.1 周辺的な意味の収録

多義語を収録する際には、その多義性をどこまで反映させるのが適切であろうか。〈増補版〉では、現在「届く」は 1 項目、「移る」は 2 項目に収録されている。これを文例とあわせて以下にあげる。なお、() 内は毎日新聞の掲載年月日と朝夕刊の別とを示したものである。

- (1) 五十メートルほど離れた海中でおぼれていた隆秋さんらしい人に救命浮輪を投げたが、届かなかった。
(93.10.10 ♀) 2.1521 移動・発着
- (2) 女性は事故直後、男性に席を替わってくれと頼まれ、運転席に移った。
(93.11.16 ♀) 2.1521 移動・発着

- (3) まもなく花から葉桜へと季節は移り、秋には落ち葉が舞うだろう。(93. 4. 9 ♫) 2.1600 時間・時刻

「届く」は〈2.1521 移動・発着〉のみに、また「移す」はさらに〈2.1600 時間・時刻〉にも収録されている。本研究では、意味の原型性を軸として一語の意味間の関係をとらえるが、動詞の場合はその動作行為の具体性、可視性はその判断基準になるとみなす。上の〈2.1521 移動・発着〉は物理的な動作行為を表し、よって「届く」は現在原型的な意味だけが収録されているといえるが、これに対応する他動詞「届ける」は、次のようにいわば周辺の意味に相当する項目にも収録されている。

2.1521 移動・発着, 2.314 聞かせ,
2.3770 授受, 2.3830 運輸

同様の処理が「届く」についてもなされると、(1)に加えて次の分類項目へも収録されることになるであろう。文例をあわせて以下にあげる。

- (4) 踏切事故対策として、衝突のショックが客車まで届かない衝撃吸収を備えているほか、車内には車いすスペースを設置。(93.10.7 朝) 2.1511 揺れ・振れ
- (5) ヤクルトは中日との2試合を落としても残り5勝で8勝に届く。(93.10.10 朝) 2.1584 [優劣]²
- (6) また伊東には十三日夜にうれしい知らせが届いた。(93.2.16 朝) 2.3121 報知
- (7) 米国の俳優、ポール・ニューマンさんから、このほど毎日新聞社会事業団に「日本の障害児のために使って欲しい」と、十萬ドルの寄付が届いた。(93.4.9 ♫) 2.3770 授受
- (8) 同空港には毎日平均して手紙約十五キロ、小包約三十キロが外国から届く。(93.5.15 ♫) 2.3830 運輸
- 一方、「移る」は〈2.1600 時間〉という周辺の意味を表す項目にも収録されているが、さらに次のような項目への収録も考えられるであろう。
- (9) 高島部屋は消滅し、力士たちは熊ヶ谷部屋に移った。(93.9.12 朝) 2.3311 学事・兵事・籍
- (10) 青島ビール(中国)の販売権がメルシャンに移った。(93.8.9 ♫) 2.3700 所有・取得

実際の文脈での使用を考慮すると、多義語における周辺の意味をどこまで取り入れるべきかという問題に直面する。個々の語の観点から多義語の意味の収録を見直し、たとえば上にあげた移動動詞であれば、多義のすべてを同列に収録するのではなく、

抽象的、精神的な行為を表す意味での収録に際しては周辺の意味としての何らかの指標を付することにより両者を区別するといったことも考えられる。それにより、多義語の意味の分布を個別的にも、また体系的にも把握することが可能になるのではないと思われる。

3.2 事象の具体度・抽象度の区別

意味カテゴリーを多義語における意味をとらえる物差しとして用いるためには、同一項目に収録する語の表す事象の具体度・抽象度を明確に区別したい。たとえば、〈2.1526 進退〉には具体的な動作行為を表す「進む」「退く」「ダッシュする」などのほかに、「はかどる」「行き詰まる」「ヒットする」など抽象的な事象を表す語が収録されているが、このような〈小項目〉に収録する語は物理的な動作行為を表す語に限定し、他の語は抽象的な動作行為を表す別の項目に収録するべきではないだろうか。〈増補版〉にはその双方に収録されていることにより生じた多義語も何語かみられる。

3.3 項目間の階層関係

『分類語彙表』は、分類番号の桁によって分類の細分を表しているが、実際に項目名を持つのは分類番号2桁の〈大項目〉と4、5桁の〈小項目〉だけであり、分類番号3桁の〈中項目〉は形式上は存在しない。しかしながら〈1.3800 仕事〉〈2.1500 作用・変化〉〈2.3150 読み書き〉など、4、5桁の数値が“0”である〈小項目〉がそれ以下の〈小項目〉に対して上位関係にあり、〈中項目〉的な存在であることもある。〈中項目〉としての〈2.15〉は、〈用の類〉全体の29.7%に相当する延べ6,437語を収録しているが、そこに含まれる46の〈小項目〉には収録内容が部分的に重複するものもみられる。

たとえば、「さがる」は〈増補版〉において次の5項目に収録されている。

2.1515 据え・置き・つり・掛けなど、
2.1540 上がり下がり, 2.1526 進退,
2.5810 増減, 2.1584 [優劣]

初めの3項目のうち〈2.1526 進退〉は前後の移動を表し〈2.1515〉〈2.1540〉は上下の移動を表す。〈2.1515〉は項目名からは予想されにくい「上げ下げする」「つり上げる」「ぶら下げる」などの語を含み、部分的に〈2.1540〉と重複するため、実際の使用例をあてはめようとすると、判断に迷うことがある。

² 〈増補版〉において項目名が空欄である場合には、適当な名称を〔 〕で括って示した。

- (11) 箱に乗って正解すると上がり、間違えると下がる。
(93.10.7 朝) 2.1515 据え・置き・つり・掛けなど？
2.1540 上がり下がり？
- (12) 会場は、万国旗に代わって学年ごとのスローガンを
書いた垂れ幕が屋上から下がり、派手な応援合戦。
(93.9.16 夕) 2.1515 据え・置き・つり・掛けなど？
2.1540 上がり下がり？
- (13) 柔軟な動きでパンチを放つては下がるチャナに対し、
大橋は小柄なチャナに大振りして有効打を奪え
ない。(93.2.11 朝) 2.1526 進退
- (14) 売薬を飲んだが、四〇度の高熱が四日間下がらず、
仕事を休んだ。(93.8.13 朝) 2.1581 増減
- (15) 三区・志水見千子はワコールの藤原恵に抜かれて二
位に下がったが、四区で吉田がワコールの阿部真由
に追いついた。(93.12.13 夕) 2.1584 [優劣]

同様のことが「下る」「進む」についても言える。

2.1521 移動・発着
2.1527 往復

- (16) 幸村戦死の地は、四天王寺の西門を西へ下った
安居天神付近とされている。(93.5.7 夕)
- (17) ベトナム人虐殺のうわさが広がり、この日もベ
トナム漁民約三千人がボートでメコン川を下っ
た。(93.4.7 夕)

2.1520 進行・経由
2.1526 進退

- (18) 大型の台風19号は七日午後、並の強さに勢力
を弱め、スピードを速めながら日本の南海上に
北東に進んだ。(93.10.8 朝)
- (19) お二人の車は四台のオートバイと二台のサイド
カーの隊列にはさまれる形で進んだ。
(93.6.10 朝)

このような項目間での収録内容の重複によっても、
シソーラスにおける見かけ上の多義語が生じる可能
性がある。しかしながら、このような問題が解消さ
れ、項目間の階層関係が整備されることにより、あ
る語の意味が上位概念的にも下位概念的にも用いら
れ得るかどうかという点からその語の意味の広さを
はかることができると思われる。たとえば、類義関
係にある単純動詞、複合動詞、サ変動詞間の意味の
比較が体系的に行えるのではないだろうか。

4. おわりに

以上に述べてきたことは、あくまで本研究の目的
を遂行するために用いる道具としてのシソーラスの
理想にすぎない。

『分類語彙表』は語を分類することに主眼を置く
ものではなく、単語の表しうる意味の世界を追究し
たものである。しかしながら、そこに収録される各々
の語の実際文脈における使用という観点を加え、そ
の体系や収録のしかたに反映させることによって、
言語研究へのより有効な活用が可能になるのではな
いかと期待される。

本研究では、『分類語彙表』の分類体系を土台と
して、研究に用いるための意味カテゴリーの構築を
事例の分析と並行しながら進めている。その内容に
関してはここでは触れることができなかったが、これ
を通して語の多義性の観点から日本語の語彙体系
の追究につとめたいと考えている。また、多義に関
する点だけでなく、たとえば、英語のシソーラスに
みられるような語の位相を表す指標付けなどを行う
ことにより、語の文脈における使用の実態を反映す
ることができるのではないと思われる。

[文 献]

- 国語研究所 (1964) 『分類語彙表』, 秀英出版。
—— (1996) 『分類語彙表』形式による語
彙分類表 (増補版)。
大塚 みさ (1995a) 国語辞典における多義語の量
的傾向, 計量国語学 19-8。
—— (1995b) 意味分野から見た辞書的な多
義語について, 計量国語学 20-3。